

中井町生涯学習融合施設(仮称)Q&A



2025 年7月現在

はじめに

中井町生涯学習融合施設(仮称)を整備するにあたり、この Q&A は地域住民に対して透明性を高め、理解と信頼を促進するために作成したものです。施設の目的や経緯についての疑問に答えることで、誤解や不安を事前に解消し、円滑な施設整備につながるため、積極的な情報共有のために公開するものです。今後、進捗状況に応じて更新していきます。

目次

1 整備計画などについて

Q1-1 生涯学習融合施設(仮称)が建設されるまでの経緯を教えてください	1P
Q1-2 生涯学習融合施設(仮称)の役割(基本コンセプト)は何ですか	1P
Q1-3 生涯学習融合施設(仮称)に求められるものは何ですか	2P
Q1-4 多機能融合施設には、どのようなメリットがありますか	3P
Q1-5 どのような施設づくりをめざしていますか	4P
Q1-6 町民の意見などは、どのように反映されていますか	4P
Q1-7 検討委員会は設置されなかったのですか	5P
Q1-8 設計者はどのように決めましたか	5P
Q1-9 「比奈窪 56 プラン」とは何ですか	6P

2 施設の規模について

Q2-1 どのぐらいの大きさの施設を予定していますか	7P
Q2-2 どのような諸室が造られる予定ですか	7P
Q2-3 いつ完成予定ですか	7P
Q2-4 カフェ等のショップは入りますか	8P

3 建設工事費などについて

Q3-1 建設工事費は、どの程度を見込んでいますか	8P
Q3-2 建設工事費の財源はどのようになっていますか	8P
Q3-3 建設工事費が下がるまで工期を延期することはありますか	8P

1 整備計画などについて

Q1-1

生涯学習融合施設(仮称)が建設されるまでの経緯を教えてください

中井町役場本庁舎に隣接する中井町農村環境改善センターは、昭和58年(1983年)に建設され、町の生涯学習・地域交流の中核を担ってきましたが、施設が手狭な点、設備に不備がある点、バリアフリーが整っていない点などの課題を抱えてきました。加えて、建物の老朽化が進む中、多様化し高度化する生涯学習のニーズに応えるためにも、農村環境改善センターの大規模修繕や長寿命化ではなく、役場中心拠点に新築し、拠点整備と一体的に取り組むことで積年の課題解決と持続可能なまちづくりを見据えた現代的意義を高めることとしました。

新たな生涯学習施設については、平成18年(2006年)以降、検討が繰り返されてきました。平成26年(2014年)の生涯学習に関するアンケート調査でも、生涯学習に関する情報サービスの充実、誰でも参加できる場の充実、生涯学習活動拠点の必要性に対する多くの要望が挙げられており、それらを踏まえ、平成28年(2016年)には『中井町生涯学習施設建設基本構想』が策定され、中村川対岸に新たな施設を建設する方向性が示されましたが、財政的に難しいとして、実現に至らなかった経緯があります。

令和6年度(2024年度)から、役場中心拠点整備と合わせた生涯学習施設建設の取り組みが開始され、同年度末、町民主体の検討の元、基本構想・基本計画が策定されました。

Q1-2

生涯学習融合施設(仮称)の役割(基本コンセプト)は何ですか

本施設の役割は、中井町の現況や町民の意見に基づき、生涯学習と地域交流を育むための拠点施設になることが期待されます。これらの期待に応えるためには、多世代・多文化の人々が日常的に訪れたいと思えるような、「集い・憩い」の環境を整備することが必要になります。

また、様々な目的を持った町民が集い、互いに教え学び合うことで、豊かな人間性と地域への愛着が育まれます。そうした関係性が蓄積していくことで、生涯学習施設は中井町のシンボルとなります。生涯学習施設はそうしたシンボル性を適度なデザインをもってハードとソフトの両面で有するものであることが必要です。

生涯学習・地域交流拠点として、多世代・多文化の人々が集い、学び、憩い、寛ぎ、交流することで、賑わいと地域への愛着を育む生涯学習施設をめざし、「学びからはじまる『里都まち♥なかい』交流のシンボル」を基本理念に掲げます。

Q1-3

生涯学習融合施設(仮称)に求められるものは何ですか

中井町の概況やアンケート調査、既存施設の調査から、次のような3つの役割が求められていると考えられます。(1)既存施設間のネットワーク形成 (2)多様なニーズへの対応 (3)機能に定義されない活動の許容。以上により、生涯学習施設は「多機能融合施設」であることが望まれます。

さらに、本施設の設計・整備にあたっては、次の基本的要件を満たすことが必要条件とされています。

- 共生をさらに引き出す包摂性:ユニバーサルデザインから進んだインクルーシブデザインの考えに基づき、多文化・多世代の共生を引き出すこと。
 - 役場中心拠点(比奈窪56エリア)一帯を牽引するデザイン性:田園風景を大事にしつつも、将来計画の中心施設として求心力を持ち、数十年を経て輝く熟慮されたデザインであること。
 - 生活の質(QOL)を保障するフェーズフリー性:日常時(平常時)と非常時(災害時)の区別なくQOLを保障し、防災・減災の取り組みがハードとソフトの両面で組み込まれていること。
 - 社会教育を促進するDX:来訪利用だけでなく、自宅など遠隔からでも機能を利用できるなど、デジタル技術による喜びを感じられる環境を実現すること。
 - ハードとソフト両面での環境配慮の徹底:ZEB(Net Zero Energy Building)の推進や利用時の不要な廃棄物排出を発生させないこと。
 - ライフサイクルコストを低減する維持管理の仕組み:竣工後最低 50 年続く維持管理において、後年のライフサイクルコストを低減できる具体的で現実的な仕組みを持つこと。
-

Q1-4

多機能融合施設には、どのようなメリットがありますか

公共施設の複合化は、経済的、社会的、環境的な観点から多くの利点をもたらす可能性があります。

(1)効率的な資源の利用

複数の機能を持つ施設を一つの場所に集約することで、土地や建物、設備の利用効率が向上します。これにより、運営コストを削減できる可能性があります。

(2)利便性の向上

利用者にとって、様々なサービスや施設が一箇所で利用できるため、移動の手間が省けるとともに、時間の節約にもつながります。

(3)コミュニティの活性化

複合化された施設は、地域住民が集まる場所となり、交流やコミュニティ活動を促進します。これにより、地域の絆が深まることが期待されます。

(4)サービスの多様化

複合化によって、異なるサービスやプログラムを同時に提供できるため、利用者のニーズに応じた多様な選択肢が生まれます。

(5)環境への配慮

複合施設は、エネルギー効率の向上や資源の共有を促進するため、環境負荷を軽減する可能性があります。

(6)維持管理の効率化

一つの建物で複数の機能を持つことで、維持管理や運営の効率が向上し、長期的なコスト削減が期待できます。

(7)安全性の向上

複合化された施設は、多くの人が集まるため、警備や安全対策を一元化しやすく、セキュリティ面でも利点があります。

Q1-5

どのような施設づくりをめざすのですか

中井町生涯学習施設建設基本構想で定めた次の3つのキーワードを重視した施設づくりを目指しています。

(1)「集う×憩う」＝町民が気軽に立ち寄れる地域交流の拠点

始点、終点、分岐点となるターミナル的な性格があり、日常生活や生涯学習などの多様な目的に応じて気軽に立ち寄れ、子どもから高齢者まで、また障がい者や外国人など、多世代・多文化の人々が集い、互いの活動や交流を通して憩える施設。

(2)「学ぶ×教える」＝多様な学習や芸術文化活動などの生涯学習の拠点

様々な情報が充実し、町民一人ひとりの多様なニーズに応えられる学習環境であり、芸術文化活動の発表などを通してお互いの学びを教え合うことで次なる学びの機会を創出する施設。

(3)「繋がる×交わる」＝既存施設の連携を生み出す拠点

様々な機能を融合することで多様な利用者が集まる空間を生み出し、本町に点在する既存施設と類似する機能を取り入れながら、施設間の連携・融合、行き来のしやすさも生み出す施設。

Q1-6

町民の意見などは、どのように反映されていますか

令和6年度に全6回開催された「わいがやサロン(ワークショップ)」に、町民が基本構想・基本計画の策定段階から参加しました。

わいがやサロンは、施設が完成した後に実際に利用することになる町民の意見を、ワークショップ形式で取り入れる場であり、小学5年生以上であれば誰でも自由に参加でき、参加者自身が検討委員会のメンバーであるという認識で運営されました。わいがやサロンでは「毎回参加しなくても大丈夫!」「参加対象は無条件」「町民みんなが検討委員会のメンバー!」という3箇条を掲げています。

挙げられた意見は「基本計画で検討すべきこと」として56項目にまとめられ、一つひとつが第6回のわいがやサロンで吟味され、直接的あるいは間接的に反映させた基本構想・基本計画について、パブリックコメントを行い町民の皆さんの意見がどのように反映されているかを公開しました。

具体的な反映意見としては、子どもたちが遊べる屋根付きのお庭、公園のようなみんなが集まって憩う場所、飲み物が飲める勉強スペース、予定・予約なしで利用できるフリースペース、遊びながら待ち合わせできるスペース、趣味の作品を発表できるスペース、ペットと一緒に集まれる場所などがあります。

美・緑(みりよく)なかいフェスティバル2024での出張わいがやサロンで取られたアンケートで最も多くの票を集めた意見は「障がい者施設の一室」であり、インクルーシブな配慮は、生涯学習施設全般の基本的な要件として配慮することとし、計画に落とし込んでいます。

一方、プール、温泉、貸し出しできる家のような機能は、社会教育施設としての制約から導入は困難と判断され、見送られましたが、これらの要望は引き続き町政全体で共有されています。

今後とも、わいがやサロンなどの町民との対話の場を継続的に設けていく予定です。

参考:note 記事「みなさんの願いが未来を創る。中井町生涯学習施設「基本計画」の舞台裏」

<https://note.com/waigayasalon/n/nca3e70c36053> 等

Q1-7

検討委員会は設置されなかったのですか

平成18年(2006年)以降、生涯学習施設建設準備委員会など検討委員会形式での検討を行い、平成30年(2018年)に休止されました。今回は、施設を使用する町民一人ひとりが検討委員会のメンバーという認識のもと、「わいがやサロン」に誰もが参加できる環境を整えました。なお施設利用などで準備委員会に含まれる可能性のある各種団体等にも参加の呼びかけを行うなど、都度都度広く参加を募ってきました。

今後の施設の利活用においても、町民との協働のまちづくりを推進する体制を強化し、利用者が存分に「使いこなす、使いたおす」場となるよう、令和7年度より生涯学習のみならず地域課題も担う人材育成も行い、町と町民が協働して本施設を利活用していくこととしています。

Q1-8

設計者はどのように決めましたか

設計者は、外部から提案を募る「公募型プロポーザル」により決定しました。公募型プロポーザルは優れた建築設計を実現するための有効な方法の1つで、「案ではなく人を選ぶ」方法です。計 33 者からの提案がありました。

選定は1次審査(書類審査)と2次審査(公開対話審査)の2段階形式で実施されました。建築家で茨城大学教授の遠藤克彦氏が委員長を務め、ランドスケープデザイナー、わいがやサロン参加者、町及び町教育委員会の5人からなる選定委員会が審査を行いました。

設計者には、単に本施設を設計するだけでなく、「比奈窪56プラン」を踏まえて長期的な視野でエリア全体の未来に責任を負える人物が求められます。施設が50年以上使用されることを前提に、設計者として持続的に関わり、責任を持てる可能性も重視されました。応募資格としては、若手設計者にも門戸を広げ、延床面積500㎡以上の公共的建築の設計業務実績、または3件以上の建物竣工実績と総延床面積500㎡以上の実績が求められるなど、参加実績要件が可能な限り下げられたこともポイントです。

この「公募型プロポーザル」により選定されたのは、SUGAWARADAISUKE 建築事務所株式会社です。選定理由としては、「比奈窪56エリア」全体を俯瞰し、生涯学習施設の役割を丁寧に読み解いた1次提案と、それを具体的に建築に落とし込んだ2次提案が高く評価されました。特に、農村環境改善センター解体跡地に計画される「みんなの広場」との連携を考慮した大庇広場、それに繋がる「みんなのホール」の配置位置が、町民の普段使いが可能な有用なデザインとして高く評価されました。また、建物に裏がなく、周囲への細かい配慮によって多くの人の居場所が作り出されていることや、新たな交通計画を盛り込み町全体の回遊性を得ようとする提案も高く評価されました。

参考:note 記事「選ばれたのは“町に寄り添う”設計者——プロポーザル最終審査レポート」

<https://note.com/waigayasalon/n/ndf76bd105745>

参考:Youtube 動画「【ダイジェスト版】中井町のこれからの社会教育に資する生涯学習融合施設
(仮称)設計者認定プロポーザル 最終審査」

<https://note.com/waigayasalon/n/ndf76bd105745>

Q1-9

「比奈窪 56 プラン」とは何ですか

「比奈窪 56 プラン」は、中井町役場の住所が「56 番地」であることに由来して名付けられた名称です。このプランは、生涯学習センター単体だけでなく、周辺エリア(農村環境改善センター跡地、北側のバイパスまでの部分など)を含めて、将来的に意義ある拠点として一体的に検討していくことを指します。比奈窪 56 エリアには、役場本庁舎以外にも保健福祉センター、農村環境改善センター、郷土資料館(閉館)、駐車場が立地しており、中井町の公共施設が集約されています。本計画では、閉館中の郷土資料館が立地する役場東側用地に生涯学習施設を整備し、整備後に農村環境改善センターを取り壊す(除却)予定です。この一連の事業が進むと、比奈窪 56 エリア一帯の風景は大きく変わるとされています。「比奈窪 56 プラン」は、単に生涯学習施設を整備するだけでなく、比奈窪 56 エリアの風景やランドスケープをつくり変えていくものであり、この土地を単なる敷地と考えるのではなく、「価値を生み出す力をもったエリア」と考える「エリアマネジメント」の考え方に基いています。今後の設計では、比奈窪 56 プランの対象地域全体でランドスケープの検討を進めることになっています。

2 施設の規模などについて

Q2-1

どのぐらいの大きさの施設を予定していますか

2階建てで、延床面積が約 2,700 m²を予定しています。

Q2-2

どのような諸室が造られる予定ですか

基本計画に記載の8つの機能(交流機能、多目的ホール機能、外構機能、図書館機能、学習機能、資料館機能、連携・融合機能、防災機能)を備えた施設にするため、次の諸室を現時点では計画しています。

多目的ホール、ステージ、ホワイエ、図書ゾーン、本棚ギャラリー、多目的室、和室、企画常設展示室、コミュニティカフェ、企画常設展示室、山並みギャラリー、学習ギャラリーなど

これらの機能は、互いに混じり合い、連携や融合することでそれぞれの機能の価値をより高めることを目指しています。特に、多目的ホールは、20歳の集いや敬老会、卓球やバドミントンなどの軽易な室内運動に対応できる多機能ホールを目指しており、床面積が約320m²を想定しています。これには260 席程度の可動席や収納部分、舞台袖なども含めた全体面積で、フロアをフラットにした場合に500人程度が入れる規模をめざしています。

Q2-3

いつ完成予定ですか

令和8年度から建設工事に着工し、令和9年12月に完成する予定です。その後、令和10年中に農村環境改善センター周辺の解体を行い、その跡地を含む再整備を行うことで、比奈窪56プランとして一連の役場周辺拠点整備が終了します。

Q2-4

カフェ等のショップは入りますか

わいがやサロン内でも同様の意見が多く挙がりましたが、建設予定地が市街化調整区域内であること、生涯学習融合施設(仮称)を社会教育法上の公民館として建設すること等から、収益を目的とした施設を入れられないなど、様々な制約があります。民間のカフェ等は導入することはできませんので、「コミュニティカフェ」として、来場者同士が交流を深められるようなスペースの整備を予定しています。

3 建設工事費などについて

Q3-1

建設工事費は、どの程度を見込んでいますか

本施設の想定工事費は 23 億 5000 万円(税込、申請手数料別途)です。これは 2024 年 11 月時点での見積もりに基づくものであり、今後、建設資材の高騰や労務費の上昇などにより変動する可能性があります。

本体工事費以外にも設計監理費や備品購入費、さらに外構や駐車場工事費が必要と予想されます。その他、地盤調査費、測量費、用地の購入費、既存施設の取り壊しなどの費用が必要となります。

Q3-2

建設工事費の財源はどのようになっていますか

役場周辺拠点整備(比奈窪56プラン)完了までを踏まえ、財政調整基金や公共施設建設積立金の取り崩し、国からの補助金活用や町債を含み、町の将来負担が軽減されるよう進めています。

Q3-3

建設工事費が下がるまで工期を延期することはありますか

物価高騰は当面 5～10 年で改善が見込めないから、適切な意思決定と工事・竣工を着実に行うことが、現時点でもっとも現実的な対策と考えられ、基本計画でも、スケジュール遅延の想定リスクがあり、遅延すれば現在の物価高騰の影響をより一層受けることになることと認識されています。予定価格に収めるため再度設計をする間に、さらなる価格高騰により、予定価格に納まらなくなる事例等もあることから、中井町、計画や設計の受託者・支援者が一体となって事業に取り組む必要があります。
